

～7m手前では GK が飛び出してジャンプ-手を伸ばしてもギリギリ届かない高さで、そこからわずかの距離でピッチ上まで落ちている。

リバプール GK ケレハーはは感知できなかったが、セットプレーであるのでニューカッスル側には共通理解があったということは想像できるけれども、こういう武器を持つことで戦術的幅が広がるであろう。

《書評》

P. ベルウッド：河合信和訳『500万年のオデッセイ～人類の大拡散物語～』
(青土社、2024年)

原題：The Five-Million-Year Odyssey: The Human Journey from Ape to
Agriculture(Princeton University Press, 2022)

人類学の大御所・埴原和郎は、2000年に「人類の進化－試練と淘汰の道のり」を出版し、更に2004年に学術文庫版「人類の進化～20世紀の総括」(講談社・2004)として、2001年以降相次いだアフリカでの猿人化石の発見が従来の見解と異なる可能性を示唆した。また、ネアンデルタール人のミトコンドリア DNA 解析などの自然人類学分野での研究が今後大きな意味を持つことにも言及し「驚くべき発見は今後も続々と報告されるに違いない。この本も、書き終わった段階ですぐに書き直し・・・ということにもなりかねないのである。」と述べている。2015年以降はそれまでの1万6千塩基のミトコンドリア DNA 解析から、2001年の「ヒトゲノム計画」実現以降30億塩基を対象とした全ゲノム解析の手法が急速に進展した。2017年、古代DNA解析の第一人者、ハーバード大学のデイビット・ライクが「WHO WE ARE AND HOW WE GOT HERE (邦訳：交雑する人類、NHK出版、2018)」を出版し、この分野の急激な発展が紹介された。

著者のベルウッドは、1943年英国レスター市生まれ、ケンブリッジ大学で博士号を取得後1967年にニュージーランド・オークランド大学の考古学ポストを経て1973年からキャンベラのオーストラリア国立大学(ANU)で考古学、言語史と人類進化を結び付けた研究を進め、2008年に「農耕起源の人類史」(京都大学学術出版会)を出版している。

ちなみに翻訳者の河合信和氏は、科学ジャーナリストで「ヒトの進化700万年史」(筑摩書房、2010年)の著書もあり、「訳者後書き」で優れたコメントを残している。

本書出版の意図は、人間の行動の複雑さにふさわしい一般人にも理解できるように書かれた「500万年のオデッセイ」という大変に意欲的な内容となっている。

本書の構成は、以下の章と項目から構成されている。

序 章

一考古学者として言語学と遺伝子をどのように理解してきたのか～多角的資料から過去を復元する～「先史時代」に関して (99.99%を占める：山崎)

第1章 オデッセイの出現

ヒト族 500 万年の偉業～脳、文化の創造、そして人口数～四幕ドラマとしてのヒト族進化～人口成長と移住：なぜ問題なのか～舞台としての私たちの世界～どのくらい古いのか？過去の年代を推定する

第2章 オデッセイが始まる

どのようにしてヒト族は誕生したのか？～失われた環（ミッシングリンク）、そしてヒト族とチンパンジー族の謎の共通祖先～チンパンジー族/ヒト族の分岐に関して～巣から出て：最初のヒト族の出現～鮮新世の祖先たち：アウストラロピテクス族～「石器製作者としてのヒト（ストーンツールメーカー）」～250 万年前以後の大きな歩み：初期ホモ属～ヒトの行動の起源

第3章 アフリカから出て

更新世の編年：主要ポイント～更新世の氷期-間氷期サイクルとヒト族のアジアへの移住～故地を抜け出す～初期の出アフリカ：何回か？～前期更新世ホモが北アフリカとアジアに到着～ホモ・エレクトス：中国とジャワに到達して～フローレンス島の謎～ルソン島、フィリピン諸島～ホモ・エレクトスとその同時代者の石器

第4章 新しい種の登場

人類進化の過程の理解～ヨーロッパのホモ・アンテセソール～謎のホモ・ハイデルベルゲンシス～アシューリアン・アシュール文化～中期更新世後葉の「重要な三つ」の種～ネアンデルタール人～デニーソヴァ人とハルビン人集団～ネアンデルタール人とデニーソヴァ人：寒さに挑戦し壁面に絵を描く？～他の中期更新世ヒト族についてはどうか？

第5章 謎の新参者

ほら、ここにもホモ・サピエンスが～早期ホモ・サピエンスについての難題～ホモ・サピエンスの出現：頭蓋と遺伝子～アフリカを脱して、謎とともに～ホモ・サピエンスの出現：考古学～ユーラシアの上部旧石器文化～ホモ・サピエンス、そしてネアンデルタール人の絶滅～ホモ・サピエンスのユーラシア東部への拡散～サフルへ進む～いつオーストラリアに植民したのか？オーストラリアにはどのようにして植民したのか？～最初のオーストラリア人はどのくらい居たのか？～アフリカの外へのシナリオ～長く残る謎：個人的な話

第6章 境界を広げる

寒冷地に勇敢に挑戦する；北東アジアと北米大陸～上部旧石器時代の日本～最初のアメリカ人は日本起源か？～アメリカにたどり着く～最初のアメリカ人の証拠～言語と最初のアメリカ人～遺伝子と最初のアメリカ人～Y人類集団か？～氷床の南～極北カナダの完新世の移住：古イヌイットとチューレ文化イヌイット

第7章 食料生産がどのように世界を変えたか

古代の食糧生産は何だったのか？～食糧生産の長所～現代の私たちを今も養っている古代の栽培作物と家畜～食糧生産の故地～偶然の一致？～植物と動物を栽培家畜化するために人はそれらに何をしたのか？～最初の農耕民は、植物と動物の栽培家畜化を意図的に進めたのか？～何故栽培家畜化なのか？

第8章 植物栽培と動物家畜化の故地

肥沃な三日月地帯～ナトゥーフ文化～肥沃な三日月地帯の新石器時代～キプロス～人口増と文化的成長の土地～肥沃な三日月地帯の新石器文化の変容～東アジアの初期農耕民～雑穀とコメ～東アジアの新石器文化の主要傾向～東アジア新石器集団の機構～アフリカのサヘルとスーダン～サハラの湿潤期～肥沃な三日月地帯からやって来た農耕民と牧畜民～サバンナと疎林草原～パンツァー族移住の背後の栽培食糧経済～ニューギニア高地～赤道の農耕故地～アメリカの農耕の故地～アメリカの最初の農耕民～南米：アンデスとアマゾン川流域～メソアメリカ～合衆国の東部ウッドランド地帯～ここまでのストーリー

第9章 遠い過去からの声

初期農耕民拡散仮説～言語を通して人間の過去を理解する～何故先史時代の復元に語族は重要なのか？～語族は「民族」と同じか？～語族の起源～語族の拡大：新しい年代の歴史から比較した見方～エリート支配は言語を広げたのか？～人類集団の地球的な先史学に向けての今後

第10章 肥沃な三日月地帯とユーラシア西部

肥沃な三日月地帯の初期村落～紀元前 7000～同 4000 年のヨーロッパへの新石器住民の移住：考古学～ヨーロッパ新石器農耕民の移住：遺伝学～肥沃な三日月地帯東部からの移住～南アジアの初期農耕民たち～ヨーロッパと草原地帯～インド・ヨーロッパ語族について議論のある先史時代～ポントス高原から移動したヤムヤナ民族は、最古のインド・ヨーロッパ語族を広げたのか？～インダス川の先の南アジア～インド南部とドラヴィダ語族～次に南西アジアで何が起こったか？

第11章 アジア・太平洋の冒険

東アジアとサフルの古代の人類集団～トランスユーラシア語族の拡散過程を追う～黄河とシナ・チベット語族～中国南部と東南アジア大陸部の新石器集落～オーストロアジア語族の謎～オーストロネシア語族～オーストロネシア語族からの教訓～マレー・ポリネシア語族とパプア語族～ポリネシアの植民～コメ対ヤムイモ？

第12章 アフリカ、オーストラリア、そして南北アメリカ

アフリカ大陸～レヴァント南部から北アフリカへのアフロ・アジア語族話者の移住～サハラ以南のアフリカの変貌～バンツァー族のディアスポラ～オーストラリア大陸～南北アメリカ大陸～移住する北アメリカの狩猟採集民～南米大陸の農耕民の拡大：いくつかの例～アルゴンキン語族とユト・アステカ語族

第13章 類人猿から農業へ

食糧生産はルールを変えたのか？

本書では、まさに“The Human Journey from Ape to Agriculture”というサブタイトルに象徴される「考古学（人類学）」「遺伝学」「言語学」を包括した検討が展開されている。

特に第8章の植物栽培と動物家畜化以降の展開が、農耕の発生に関わる初期農耕民についてのベルウッドの「農耕起源の人類史（2008年）」の研究からの発展といえる。

そして第9章以降は、言語学的な側面から「初期農耕民拡散仮説」と「語族の起源」について論じており、特に「肥沃な三日月地帯の新石器生業経済は、受け入れ可能な新しい環境に容易に移すことができる完全に栽培化された作物と家畜に依存した高い水準に達していた」ことから紀元前6500年から4000年の「未曾有の大移住の爆発」があったことを示唆している。また、第11章では、東アジアからサフルランドからスダランドを経てのマレー・ポリネシアに至る太平洋での拡散が、第12章では、アフリカでのレヴァント地方からの農耕牧畜民の移住がサハラ以南のアフリカでの狩猟採集民の少数化と遊牧民の生活様式の採用をもたらしたこと。更にベルウッドのホームタウンであるオーストラリア大陸での拡散や南北アメリカでの拡散についても語族からの詳細な分析を行っている。

ホモ・サピエンスへの進化に関わる身体運動様式をめぐっては、ホモ・エレクトス以降デニーソヴァ人やネアンデルタール人にいたる「狩猟採集行動とそのテリトリー拡大」と「出アフリカ以降の世界拡散につながる航海や河川遡上を支えた行動様式の発展」があったことはあきらかである。

また、紀元前9000年とされる新石器時代のトルコのギョベクリ・テペ遺跡に象徴的な集団での「祭祀」に関わる身体運動様式の存在も、それ以降の農業生産にかかわる「祭祀（祈願）」として継続・継承されて独自の進化を遂げたことも十分推察される。

そして、狩猟採集活動から農業生産拡大へと至る過程では、食糧確保や環境条件によって両者が共存する時間的・空間的なタイムラグ（狩猟採集のテリトリー放棄などを含む）など様々な要因が存在したことが推察される。しかし、それ以降急増する人口とそれを支える栽培植物や家畜化に関わる農業の発生とその拡大に関わる身体運動様式は明確とはなっていない（現在のパプアニューギニア高地や南北アメリカやメソアメリカの先住民の農業生産活動からはある程度推測ができる？）。

山崎（2023）は、狩猟採集活動段階における「生産的狩猟採取活動」と生産性を高めるための生産的狩猟採集活動の「模倣活動」が相当の期間において混在していた可能性を指摘した（山崎健、研究ノート：人類進化の視点から探るヒトの身体活動の独自性、現代スポーツ研究、第7号、2023）。

狩猟採集と農地耕作や牧畜に関わる生産労働は様々な様相を持って変容していったことが推察され、十分な食料確保とそれに伴う人口の急増は、植物栽培と動物家畜化による農業生産活動が主要な身体運動様式として置き換わっていったことが考えられる。

しかし、肥沃な三日月地帯からの農耕民の拡散様式と、東アジアからサフルを経てオーストラリア・ポリネシアへと至る「栽培植物と家畜を携えた航海」といった拡散様式では身体活動様式が異なることも考えられ、さらに紀元前 3000 年以降とされる銅器・青銅器の「ヤマヤナ分化」を携えてのステップ高原からの牧畜民集団のヨーロッパへの拡散にかかわる身体運動様式もまた異なるものと考えられる。

しかしいずれの身体運動様式も「狩猟採集活動」のような 10~30Km にも及ぶ「全身運動としての行動様式」とは異なり、家畜の放牧と作物の栽培・育種やその収穫などは時間的にも空間的にも身体的精神的にも（おそらくは“階層的”にも？）限定されていたものと思われる（農耕生産に伴い脳と身体の小形化も指摘されている）。

99.99%とされる先史時代のヒトの身体活動様式を探ることは、狩猟採集民であれば考古学的遺物（石器や投擲具、運搬用具や船など）によって、農耕牧畜民であれば農具や車輪、住居や宗教施設の遺跡（建築技術が推定される）、弓矢や槍・刀などの武器などによってある程度推定することは可能である。遺伝学での全ゲノム解析の進展は、病原菌やウィルスへの耐性がいつ獲得されたのか、エピジェネティック（後生遺伝学）な変化が何によってもたらされたかなどを検討することができる。しかし身体活動様式と言語学（語族の系譜）との関連については、有史時代以降の文化人類学的な検討以外は未だ不十分であり（消滅した語族の祭祀や踊りなどの行動様式は解明できない？）、自然人類学と言語学との関連に関わる新たな研究方法の検討が必要なものと考えられる。

（山崎 健・新潟大学名誉教授）

【事務局通信】(2025.1.7.)

今回は「スポーツ科学研究所通信」第 27 号（2024 年 10 月 13 日）以降に開かれた運営委員会について報告します。

第 47 回運営委員会報告

〈開催日〉 2024 年 11 月 30 日(土) 13:00~15:00

〈出席者〉 山崎健、坂なつこ、青沼裕之、功刀俊雄、青野桃子、石川正三

〈議 題〉

- ① 今期の運営委員会総会の日程と内容
- ② 次回の研究会の日程とプログラム
- ③ 第 8 号の研究年報の進捗状況
- ④ その他

〈審議の内容と決定事項〉